



清弘誠さん + 城之内ミサ先生 + 赤澤寿則さん

TBS プロデューサー／演出家

国連機関 ユネスコパリ本部任命
ユネスコ平和芸術家／音楽家
東邦音楽短期大学特任教授

ケイダッシュグループ
アワーソングスクリエイティブ
制作プロデューサー

THE プロフェッショナル スペシャル鼎談

短期大学・全専攻対象の授業
「THE プロフェッショナル」について

城之内ミサ先生の「THE プロフェッショナル」は、エンターテインメント業界の第一線で活躍されるボイストレーナー、ダンサー、ジャズピアニスト、舞台監督、演出家、プロデューサーなど、さまざまな分野のプロを講師に迎え、音楽界の「今」を学びつつ、音楽家として幅広く活躍するために必要なセルフプロデュース能力を身につける注目の授業です。

ここでは、ドラマ「渡る世間は鬼ばかり」などを手がけるプロデューサー／演出家の清弘誠さんと、業界最大手の芸能事務所ケイダッシュグループ・アワーソングスクリエイティブ・制作プロデューサーの赤澤寿則さんをお迎えし、このユニークな授業について話していただきました。

「THE プロフェッショナル」が目指すもの

— まず、この授業のテーマを教えてください。

城之内 東邦音楽短期大学ではクラシック音楽を学ぶというのが大元にありますが、音楽をいろいろな面から多様性をもって伝えたいと思い「THE プロフェッショナル」を企画しました。音楽理論や技術に関してはそれぞれ専門の授業がありますから、この授業が目指すのはそれ以外のところ。クラシック以外のポップスの分野だったり、あるいは音楽以外の業種のプロフェッショナルの方たちが現場で培ってきたことを学生に伝えていただくことによって、自分なりの音楽を別な角度から見つけていくための種蒔きみたいなことができればなと思っています。

— 何か具体的なモデルのようなものはありましたか？

城之内 二十歳くらいのころ、NYのジュリアード音楽院を訪ねたときに見学した授業がとても印象に残っています。ジュリアード音楽院は音楽だけでなく舞踊や演劇部門もあるのですが、俳優志望の人には音楽を、音楽家志望の人には台詞を読ませるという授業がありました。みんなとても生き生きしていて、授業の前と後では全然違うと話していました。あともう一つ、アメリカの有名なアクターズスクール出身の俳優さんがインタビューを受ける様子を、そのスクールに通う現役の学生が聞いているというテレビ番組を観たことがあって、そういう実践的な話を身近に聞けるというのはとても良いことだなと思ったのも発想のヒントになっています。



— 城之内先生自身のご経験が基になっているところも？

城之内 ありますね。私は東邦の短大在学中からテレビドラマの音楽を作るお仕事をさせていただきましたが、それまで脚本を読んだこともなかったですし、その内容を掘り下げて音楽を考えた経験もない。それまで学んできたことが何一つ通用しないという驚きとか後悔も、この授業を企画してみたいと思ったきっかけの一つです。私がドラマのお仕事を始めた頃のことは、清弘先生もよくご存知ですよ？



清弘 ええ。城之内さんと初めてお目にかかったときは、こちら側も新鮮でした。ドラマに音楽をつけることに手慣れた方とは違って、城之内さんには「このシーンからこんな音楽を発想したんだ」とか、「この芝居をこういうふうを受け止めたんだ」という新鮮さがありました。少し話は逸れますが、ドラマというのは基本的に人と人が出会って、それによって何かが生まれるということだと思うのです。ところが音楽に限らず、今の僕らの仕事は自分一人の中で完結してしまう場面が多いですね。会って話すのではなくメールで済んでしまったり。でも、微妙なフィーリングや感じ方は直接会って見ないと伝わらないし、人と話すことによって発想が広がることもあります。先ほどの城之内さんのお話を伺っていて素晴らしいなと思ったのもそこです。この授業を通して、音楽だけを追求する以上の、もっと大きな可能性が広がるのではないかと。すぐに結果が出るものではないかもしれませんが、「THE プロフェッショナル」の授業が何かの種、水、肥料のような役割になればいいなと思います。

—同じくエンターテインメント業界にいらっしゃる赤澤先生はどうお考えですか？



赤澤 音楽に関して言えば、技術や理論はもちろん必要ですが、いわゆるフィーリングや表現方法って、たとえばドラマとか映画から学ぶことはとても多いと思います。そうした中で、物事を多面的に感じ取る力を磨いてほしい。ある一方向ではなく、成長できるきっかけはいろんなところにあるんだというようなことを、僕の立場から話をできたらなと思ってこの授業に取り組んでいます。もちろん1つのことに集中して打ち込むことも大切ですが、違う価値観や考え方の中で、自分をより高めていってもらえればなど。僕はどちらかというと近所のお兄さんというか（笑）、先輩的な立ち位置から、教えるというより気軽に話すような感じで伝えています。

一步踏み出す面白さを感じてもらえたら

—実際の授業ではどんなことを行っていますか？

城之内 ほとんどの授業が、座学ではなく実践的な内容です。クラシックの発声とは全く違うポップスの歌い方を専門の人に習ったり、ジャズピアノの先生に伴奏していただきながら「上を向いて歩こう」をフェイクを交えて歌ったり。みんな最初は「え〜！できな〜い」って言いますし、強要はしないので聴いているだけでもいいんですけど、まさか歌わないだろうなっていう学生がノリノリで歌ってくれたりして（笑）。一方、清弘先生の授業では、テレビドラマの脚本に書かれた台詞をみんなで読む、いわゆる「本読み」を実践しています。



清弘 これは面白いですよ。

城之内 実際にTBSのドラマで使われた脚本を使って、監督の下で本物の役者さんがやるのと同じように、あるワンシーンの本読みをします。これも、最初は「台詞なんて絶対に読みません」なんて言っていた学生が実は上手かったり、監督からの一言で芝居が大きく変わったりするのがとても面白いです。最後にそのシーンの完成品を「実際はこうでした」という感じで観てもらおうと、さらに盛り上がりますね（笑）。

—そこで清弘先生は学生さんに演出もなさるのですね。

城之内 本物の役者さんに演出するのと全く同じやり方で、学生さんに接してくださっているんですよ。

清弘 1回目と2回目の演技で全然違ったりしますね。普段、声を出して本を読むことってほとんどないじゃないですか。でも、声に出すことによって初めて気がつくことがあるんです。たとえば「寂しい」にもいろいろな言い方があって、そのときどう思ってその言葉が出てきているか、それは十人いれば十通りある中で、作家はこういうつもりで書いているのだからって想像する楽しさがあります。私は音楽のことはわかりませんが、同じ楽譜でも弾く人が違えば同じ音にはならないわけですよ。たった1つの音のタッチだけでも違う。



城之内 そう。脚本って、音楽で言えばスコア（楽譜）だと思います。それぞれのパートに描かれているのが配役で、指揮者は監督の立場でそれをどういう音楽に構築していくのかを司る。ですから、脚本を読むこととスコアを感じながら演奏することは決してかけ離れたものではないですよ。

清弘 それがすぐに何かの役に立つことではないとしても、声を出してみるという行動によって何かが変わるという意味では有意義な授業ですよ。一歩踏み出す勇氣……と言うと大げさになりますが、やってみる面白さを感じてもらえるといいなと思っています。

受け身でなく貪欲にいろいろなものを吸収してほしい

—ほかにはどんな授業がありますか？

城之内 さらにダンスの授業もありますし、あとはスタッフ側の授業ですね。舞台監督さんや音響さんといったスタッフの方に来ていただいて、普段の仕事をスライドで見せながら説明します。そうすると、アーティストは絶対スタッフには感謝しかないなって思えるようになります。自分一人で成り立っているのではないということも、この授業の中で伝えたいことの1つです。

—そのスタッフ側の授業の1つが、赤澤先生の講義ですね。

城之内 赤澤先生にはコンポーザングアーティスト専攻でも授業を受け持っていていますが、業界で今どういう人材が求められているか、オーディションではどこを見られているかといったことを、コミュニケーションの取り方も含めてお話ししてもらっています。

赤澤 取り組み方とか心構えについての話ですね。短大の2年間なんて、何も考えないで過ごしていたら、あっという間に終わってしまいます。普通のサラリーマンでも、学生時代を漫然と過ごした人は、社会に出てから何も対応できない人になってしまうということってあると思います。特に音楽やエンターテインメントを突き詰めたいと思うなら、日々どうしているかを考えながら生活すればいいか、こういう仕事をしている人間だからこそ言えることを伝えているつもりです。



城之内 今はネットでいろんな情報を得られる時代ですが、大手の事務所の方や制作プロデューサーの方に、目の前で実際に話してもらえる機会はとても有意義なことです。赤澤先生の授業でも、先ほどのような話をしていただくと、学生たちの心構えがガラリと変わりますよ。

赤澤 ネットの情報で知った気になれてしまう、というのも問題だと思います。我々の時代のように先輩がいろいろ教えてくれたり、良い音楽や映画に触れたりする機会が少なく、「こういう音楽家になりたい」というような目標をイメージしづらくなっているんじゃないかと。こういう学校だからこそ、受け身になるんじゃなくて貪欲にいろいろなものと接しながら、自分なりに課題を持って学生生活に臨んでほしいなと思います。

これからの人生で何かのきっかけになったら嬉しい

—そういうことを直接話してもらえることの効果は、
想像以上に大きいでしょうね。

城之内 本当にそうです。こちらのお二人は、普段お仕事をしても嘘やリップサービスは言わないし、良いと思ったら絶対良いと言う。それは授業でも同じで、学生のことをちゃんと見てくださっているんです。だから講師は誰でもいいというわけではなくて、お二人に限らず「この方じゃないとダメ」という方を講師としてお招きしています。良いものを知っていて、ご自身なりの指針もあって、「THE プロフェッショナル」の意図をわかっていただけの方のお話は、必ず学生たちの心に響くはずですよ。私自身、清弘先生からも赤澤先生からもたくさんのことを学んでいますから。

清弘 こういう授業が、通常のカリキュラムに入っていることが素晴らしいし、贅沢なことですよ。何か講演会とかカルチャーセンターみたいなものだと、なかなか「さあ実践してみようか」って思えないですから。

城之内 しかも、お二人はそれぞれ「教える素養」をお持ちなんです。清弘先生は教育大（東京教育大学／現：筑波大学）を出てらっしゃって、実は教員志望だったそうです。そして赤澤先生（上智大学英文科卒）は「3年B組金八先生」を全部見ている（笑）。それをお嬢さまに見せて、生き方を教えてらっしゃるんです。

赤澤 一緒に楽しんで見ているだけですけどね（笑）。

清弘 私は先生になろうと思って教育大を選んだのですが、途中で映像の方が面白いと思うようになって、横道に逸れちゃいました（笑）。

城之内 だから先生にぴったりでしょう？（笑） 単に職種で選んでいるだけじゃなくて、そういう人間性を持っている方じゃないと、この授業は成立しないだろうと思ったのです。

—最後に、学生に向けてメッセージをいただけますか。

清弘 学生さんたち全員が音楽の道に進むのかどうかわかりませんが、この授業を通していろんなことを吸収していただいて、自分なりの音楽を生み出してもらえたらいいと思います。

赤澤 自分はこうなりたい、これをしたいと思っていることが、必ずしもその人の適性にマッチしているとは限りません。やりたいことよりやれることを評価されて、そこで成立することもあります。ですから先ほども話したように、学生時代にいろんなことを体験する機会を作って可能性を広げておくことが大切なんじゃないかと思います。

城之内 私自身、学生の頃に「音楽で食べていくななんてとんでもない」と言われたものですが、あるプロデューサーの方が私の作品を評価してくださったおかげで今の道に進むことができました。ですから、人との「出会い」はとても大きいし、社会に出るにあたっては音楽以外のことも吸収しておいたほうがいいと思います。この授業で得たものが、将来、学生それぞれの人生の中でポンと何かのきっかけになったり、生きる糧みたいなものにしていただけたら嬉しいです。